

島根県奥出雲町・雲南市 鉄師頭取の庭園と石材

庭園文化研究分科会 原 裕二

1. 石材の産地

私は長年地質調査に携わってきたので、石を見ると無意識のうちにその岩石名を探ろうとする習性が身についている。それは庭園を見る場合でも同様であり、純粹に庭を楽しみ鑑賞する際には妨げになることが多い。

しかし今回は奥出雲町と雲南市において、鉄師頭取の屋敷を視察した。いずれも自然の山肌を借景としつつ、膨大な量の石材を使う「石の庭」であった。

そこで今回は心置きなく石について述べ、庭園と石材の関係について考察する。

2. 庭園と石材・石造物の関係

使用されている石材の特徴から島根県の庭園を大きく分類すると、次のとおりである。

・出雲流庭園

庭石は花崗岩類。灯籠は来待石が多い。

・寺院の庭園(出雲地方)

庭石は花崗岩類、灯籠は来待石。石碑や塔は来待石が多いが、花崗岩製の地蔵菩薩は見られる。

・寺院の庭園(石見地方)

庭石は三郡変成岩の片岩。地蔵や灯籠には福光石や凝灰質砂岩が見られる。

・神社の庭園(出雲地方)

神社では庭園はあまり見られない。鳥居は花崗岩製。灯籠は当初は来待石で、1800年代から花崗岩製のものが増える。狛犬は圧倒的に来待石が多いが、点々と花崗岩製も見られ、近年は多くなってきた。

・神社の庭園(石見地方)

同様に神社の庭園は少ない。鳥居は花崗岩製。灯籠、狛犬は、来待石だけでなく福光石を使用するのが特徴である。1800年代から花崗岩製のものが見られる。

島根県における花崗岩類の石造物は、1663年大田市川合町・物部神社の灯籠を初めとして、1677年浜田市三隅町・湊浦八幡宮の鳥居など、大坂石大工の手になるものが発端である(永井・齋藤, 2014)。

雲南・奥出雲における石工も、もともとは和泉国(大阪府南部)から来ている。雲南市大東町・佐世神社の鳥居に1780年「石工清八」とあり、1800年以降、特に鳥居を主として、灯籠や手水鉢、地蔵菩薩、石碑などが製作された。石工は、和田一門、団野一門、梅野一門などが知られている。

狛犬は、1850年奥出雲町・大馬木天満宮に「和田源四郎幸常」とある。この時代、花崗岩製のものは非常に少なく、増えてくるのは平成になってからである(永井・齋藤, 2014、三刀屋町誌編纂委員会, 1982)。

3. 花崗閃緑岩と花崗岩

ここで岩石そのものの性質について記述する。

雲南・奥出雲で見られる花崗岩類は、花崗閃緑岩と花崗岩に分けられる。もちろん地質学上、厳密に言えば、組成と時期が少しずつ異なるマグマがいくつも地層に貫入し、それぞれの岩体を形成した（日本地質学会，2009、松浦ほか，2005、村山ほか，1973）。

しかし、古第三紀初めの5200～6700万年前に貫入したという点では同じであること、石材の観点から見れば細分することはあまり意味がないことから、大きく2つに分類した。表1に、両者の違いを示す。

表1. 花崗閃緑岩と花崗岩の違い

	大東花崗閃緑岩	鶴花崗岩・横田花崗岩
貫入時期	4400～6700万年前	4600～6300万年前 (大東花崗閃緑岩より後に貫入)
珪素SiO ₂	多い	多い
長石	斜長石>アルカリ長石	アルカリ長石>斜長石
有色鉱物	角閃石、黒雲母	黒雲母
色	白っぽい(斜長石)	赤っぽい(アルカリ長石)
粒度	中～粗粒	粗粒
岩相	石英閃緑岩の暗色包有物を含む。 縞模様が見られることがある。	ほぼ均質
風化状況	均質な真砂にはならず、玉石状の 硬質な未風化部を残す。	ほぼ均質な真砂状

日本地質学会，2009、松浦ほか，2005、周藤・小山内，2003を参考にとりまとめた。

風化花崗岩

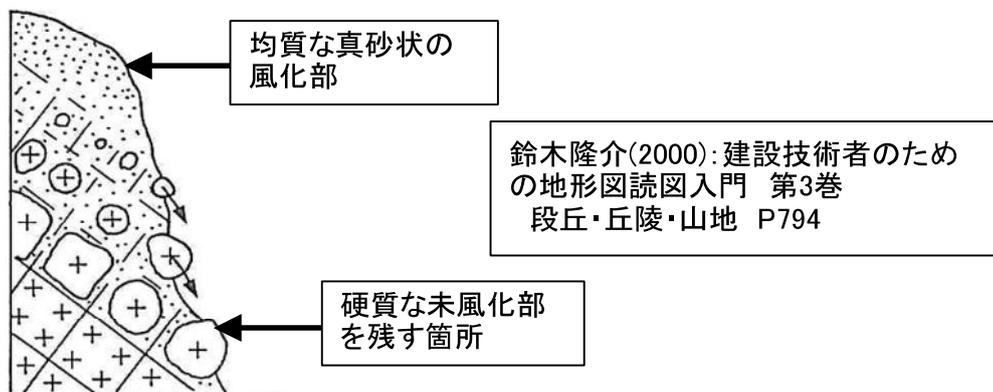




写真-1 大東花崗閃緑岩(木次町寺領)



写真-2 横田花崗岩(奥出雲町三成)

花崗閃緑岩は大東花崗閃緑岩(写真-1)に代表されるように、白っぽい岩肌である。均質な真砂にはならず、玉石状の硬質部分を残すことが特徴である。

花崗岩は、鶉(ひよどり)花崗岩や横田花崗岩(写真-2)が代表的で、やや赤っぽく、均質に真砂状に風化する。白黒写真なので、同じように見えるが、ホームページの原稿で色の違いをわかっていただきたい。

このうち石材として出荷されたのは、大東花崗閃緑岩である。これは深層まで真砂状となる鶉花崗岩と異なり、地表近くでも新鮮な露頭や未風化核岩が存在することによる。三刀屋町三刀屋の三刀屋川沿いでは石切場が数箇所あり、かつては「三刀屋石」として出荷していた(島根県地学会創立30周年記念誌編集委員会, 2016、松浦ほか, 2005)。

また、前述の和泉国・団野八次郎は1716年仁多の上阿井で石工に従事し、横田で石切を願い出ている。その後木次町に移住し石切業を営んだ(木次町史編纂委員会, 1972)。奥出雲町にもかつては石切場があったと推測される。

4. 鉄師頭取の庭の石材

本章では、鉄師頭取の庭で見た石材について述べる。

(1) 絲原家庭園

絲原家の庭園は、江戸時代後期から明治時代中期にかけて築庭されている((公財)絲原記念館・絲原家事務所)。

周辺の山々を借景とし、短冊石や臼石(うすいし)を配した典型的な出雲流庭園である。豊富な水量を利用した池泉も見事だが、書院(母屋)や茶室との調和が非常に美しい。

案内板に「築庭材料について」とあり、材料はこの付近及び近郊産のものとなる。絲原家自体は横田花崗岩分布域に位置しているので、地表で見られるのは赤褐色に風化した黒雲母花崗岩がほとんどである。白さの際立つ沓脱ぎ石や短冊石、臼石、庭の白砂は大東花崗閃緑岩の石材を持ち込んで使い、庭石は横田花崗岩の

川石を用いていると思われる。



写真-4 沓脱ぎ石や短冊石などの加工品は大東花崗閃緑岩
趣のある駕籠石は花崗岩に見える。

写真-3 色彩豊かな花崗岩類の庭石



写真-5
出雲流庭園特有の短冊石と白石



写真-6 水路の底まで石畳（横田花崗岩？）。豊富な水と石材料があればこそできること。

(2) 櫻井家庭園

櫻井家の庭園と滝は、1803年に松江藩7代藩主松平治郷(不昧)公が御成になったときに築庭された。不昧公は、流れ散る滝は「岩浪」、借景の山は「寿宝山」と名付けられ、美しさを愛でられた(櫻井家・日本庭園パンフレット)。

石組みや池泉の印象から見て、典型的な出雲流庭園とは言いがたいが、清澄ですがすがしい印象を受ける庭である。

滝の岩肌に見える岩石は、横田花崗岩(黒雲母花崗岩)である。硬質であるが節

理が発達する。庭を構成する石も、同じ横田花崗岩と思われる。

櫻井家及び可部屋集成館の敷地には、見事な石垣が続いている。御成門は藩主がおいでになったときにできたと考えるならば、その土台となる石垣も1800年代初頭に作られたと想像できる。非常に迷うが、やや赤っぽいこと、角閃石や暗色含有物が見られないことから、花崗岩と推測した。

ただし、母屋から可部屋集成館に至る石垣は、時代が下がる可能性がある。ここでは大東花崗閃緑岩と思われる材料も存在する。

時代が古いものは近隣の花崗岩、新しいものは大東花崗閃緑岩と思っているが、今後の検討課題である。

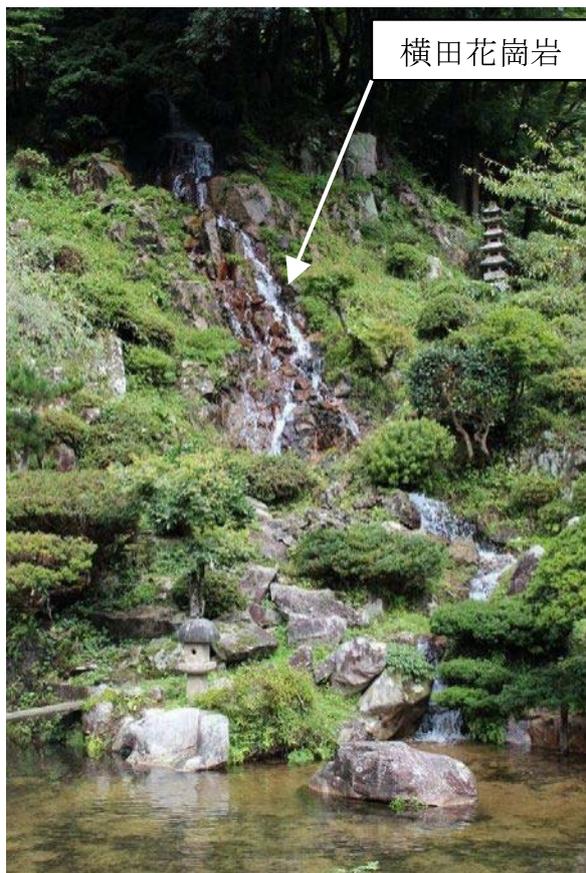


写真-7 櫻井家庭園 岩浪の滝

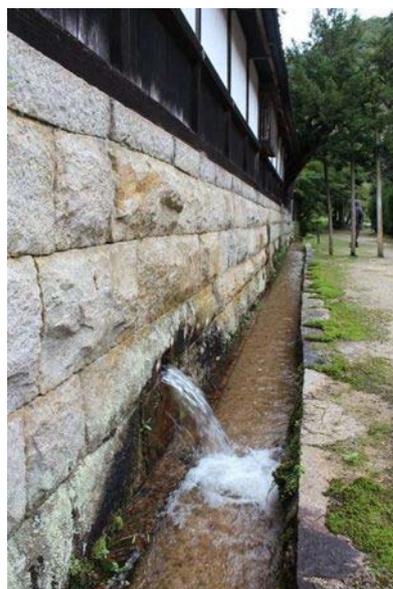


写真-8 御成門付近の石垣と接写
赤っぽく均質な岩相から花崗岩
と思うのだが・・・産地は不明。



写真-9 可部屋集成館の石垣
白色で、暗色包有物が見られる。
大東花崗閃緑岩に違いない。

(3)田部家庭園

田部家庭園は紙面の関係から割愛するが、門に至る石垣は、暗色包有物を持つ大東花崗閃緑岩であった。

写真-10 田部家の石垣
大東花崗閃緑岩



5. まとめ

石材の産地の判定は非常に難しい。

漠然と、短冊石などの加工品は石切場から運んだ大東花崗閃緑岩で、庭石や石垣、石段など精緻な加工を必要としないものは横田花崗岩と考えていた。また、時代の古いものは近隣でとれる横田花崗岩、新しいものは離れたところの大東花崗閃緑岩(たとえば三刀屋の石切場)と思っていたが、単純にそうではないらしい。

今後もう少し調査して、石材の産地を明らかにしていきたい。

6. 参考文献

木次町史編纂委員会(1972)：木次町誌，木次町，489-490.

(公財)絲原記念館・絲原家事務所：「絲原家居宅・庭園」「洗心乃路」案内のしおり
櫻井家・日本庭園パンフレット

島根県地学会創立30周年記念誌編集委員会(2016)：島根の地形・景観・奇岩，高浜印刷，56-57.

周藤賢治・小山内康人(2003)：記載岩石学，共立出版株式会社，80-85.

永井泰・齋藤正(2014)：島根の石造物データ，報光社，21-25，143-160，192.

日本地質学会(2009)：日本地方地質誌6 中国地方，朝倉書店，302-308.

松浦浩久・鹿野和彦・石塚吉浩・高木哲一(2005)：木次地域の地質，地域地質研究報告(5万分の1地質図福)，産総研地質調査総合センター，5-7，21-24，60-61.

村山正郎・服部 仁・猪木幸男・石原舜三・坂本 亨(1973)：横田地域の地質(5万分の1地質図福)，工業技術院地質調査所.

三刀屋町誌編纂委員会(1982)：三刀屋町誌，三刀屋町教育委員会，238.